

日本女性政策の変化と「ジェンダー・バックラッシュ」 に関する歴史的研究

そく ひゃん
石 橋

本研究の目的は、今日の「ジェンダー・バックラッシュ」問題を現代日本女性史の中に位置づけ、戦後の女性政策の変遷とバックラッシュの実態と本質と背景を明らかにすることにある。バックラッシュの流れの全体像を把握するとともに、このような攻撃を容認した日本社会の抱える問題を提示したこと及び、今後のジェンダー平等運動と実践が進展することを期する作業にもつながる点に、重要な意義をもっている。また、それは日本の女性政策や運動の「限界」とでも言うべき点の指摘にもつながるであろう。

第1章では、現代日本社会における「ジェンダー・バックラッシュ」現象は、どうして起こってきているのかについて、世界経済の動向や、日本の保守化とその社会経済的背景を中心に検討した。

第2章と第3章は、戦後から現代に至るまでの女性政策の中で、女性の人権と地位向上や雇用問題に主要な影響を与える政策及び制度を取り上げ、今日の「ジェンダー・バックラッシュ」問題の視点から分析・整理したものである。戦後女性政策史をその観点で見直し、のちにバックラッシュを呼び起こす原因を潜在的に保持していたことやバックラッシュを進めた政治的背景について検討した。

第4章では、「地方自治体のジェンダー行政とバックラッシュの流れ」について記述した。1996年から2009年までの「ジェンダー・バックラッシュ」の動きを発芽期・加速化期・最盛期・小康状態期という4つの時期に区分し、バックラッシュの流れの全体像を把握するとともに、その結果、浮き彫りになったことについても論じた。

第5章では、大阪府A市立B中学校における「性教育バッシング」の事例を、今日の「ジェンダー・バックラッシュ」の流れの中に位置づけた。これは、20年以上「性教育」を活発に行っていたA市のN教諭に対し、2004年から攻撃が始まり、結局2005年度以降、性教育ができない状況に追い込まれたという事件である。バックラッシュの現場の実態を具体的に記録すること自体の意義に加え、このように記述されなければ不存在になり歴史に埋もれてしまう事象を記録として残した意義があると言えよう。

第6章では、「ジェンダー・バックラッシュ」勢力の言説とその思想的特性について考察した。バックラッシュ派の具体的な主張と論調について、①性(性別・性の多様性)②家族と伝統、③家庭科教科書というカテゴリー別に整理した。また、その思想的特性を探り出し、それを解釈するとともにフェミニズム側の弱点も指摘した。